

はじめに

ある地域のミライ

Aさんは、就職のために県外から豊田市に転入してきました。豊田市に住んで数年後、結婚して子どもが生まれ、市内でマイホームを建てることになりました。新たに住むことになった地域は、同じように県外などから転入してきた家庭が多く、働き盛りの親世代とその子ども世代が増え、非常に活気のある地域となりました。

時が経ち、子どもたちは進学や就職のために親元を離れて暮らすようになりました。地域の中に、子どもや若い世代の人たちが徐々に減っていきました。

親世代であるAさんたちも年齢を重ね、長年勤めた会社を退職する年代になりました。ふと気が付けば、地域の中は、同じように夫婦のみで暮らす世帯ばかりになっていました。

退職したとはいっても、Aさんたちの世代はまだ健康で、生活に困ることはありません。現役時代はずっと仕事に打ち込んできたので、周囲との交流も少なく、地域活動と言ってもどのように参加したらよいか分かりません。夫婦で旅行に行くなどして、退職後の自由な時間を謳歌しています。

さらに時が経ちました。子どもたちも結婚し、市外でそれぞれの家庭を持っています。Aさん夫婦も、長らく夫婦二人だけで暮らしています。周りの同じ世代を見ると、夫婦のどちらかが先立ってひとり暮らしになった人たちも少なくありません。

Aさんも、徐々に体力的な衰えが見え始め、生活の中で不便なことが増えてきました。周囲も同じような家庭が多いのですが、これまでお互いの関わりが少なかったので、なかなか隣近所同士で協力し合うことができません。行政による支援も一定のものは受けられますが、限界がある状況です。

Aさん夫婦は、多少の不便さを我慢しながら生活しています。このままさらに時が経てば、近くの商店や医療機関もなくなり、地域が限界集落となってしまうそうです。

買物や通院といった生活の問題や、これから孤独に暮らしていくことになるのかもしれないという不安を抱えながら、Aさんは生活しています。

「もっと地域で仲間をつくっておけば」「もっと地域のことを真剣に考えて行動していれば」と思いながら毎日を過ごしています。



今、何も行動に移さなかったら、市内において、将来本当にこのような地域がいくつも生まれてしまいます。今何をすべきか、住民、地域、事業者、社会福祉協議会、行政がそれぞれの役割について考えていく必要があります。

次に示す、市内で実際にあった出来事は、「私たちがすべきこと」を考えるきっかけになるものです。

3月のとある日の出来事

3月のとある月曜日の夜、地域福祉課の職員が市役所で残業をしていると、一本の電話が入りました。一人の市民からの電話です。

「お隣に住んでいるBさんの姿が確認できない。」

どうやら、家の電気が点いていない、でも家の中からテレビの音が聞こえる、新聞も溜まっている、家はどこも施錠されており中の様子が確認できない、そんな模様です。

Bさんが、ひとり暮らし高齢者として市に登録していることを確認して、ひとまず、現場に急行しました。

Bさん宅に着くと、電話をくれたお隣に住むCさん、ご近所のDさん、地域の民生委員さんと合流しました。

3月でも夜はまだとても寒いですが、私たちが来るのを外で待っていていました。合流した皆さんと一緒に家の様子を確認しましたが、電話で聞いていたとおりで、家の外から声を掛けても返事はありません。

Bさんは、89歳。ひとり暮らしで、Cさん家族と日頃から一緒に買い物に行くなど親しくしており、先週の木曜日には元気な姿を見せてくれたとのことでした。

Cさんは、Bさんの遠方に住む姪のEさんとも懇意にしており、既にEさんに事情を説明し、ガラスを破って家の中に入ることに了解を得ていました。

すぐさま、警察を呼びました。

警察が到着し、ガラスを破って家の中に入りました。

Bさんは、ベッドで横になり、口から物を吐いた状態で意識を失っていましたが、一命を取り留めました。

救急車を呼び、Cさんも一緒に行っていただき、状況の説明をしていただきました。

翌日、姪のEさんが来てくれて対応してもらうことができました。

Bさんがご近所付き合いを大切にしてくれていたのが、一命を取り留めることができたのです。



ある外国人夫婦の出来事



豊田市内に住むベトナム人夫婦のFさんとGさん。

夫のFさんは日本語を話せますが、妻のGさんは日本語が話せません。

Gさんは出産を控えており、Fさんがいない時に何かあったらどうしたらいいのかと、不安に思っていました。

そこで、Fさんは市に相談し、保健師にタクシーの呼び方や準備しておくものなどについて詳しく教えてもらいました。丁寧に教えてもらい、2人はやっとそこでひと安心できました。

しばらく経って、無事、Fさん、Gさん夫婦にかわいい赤ちゃんが誕生しました。初めての子育てで、夫婦は赤ちゃんのお風呂の入れ方やおむつの交換、授乳の仕方など分からないことだらけです。どこか相談できる場所はないかと探し、「とよたファミリーサポートセンター」に出会いました。そこで子育てについて相談し、何度もセンターに登録されているボランティアさんと打合せを行いました。ベトナム語の翻訳機なども調達しながらコミュニケーションを図り、Fさん、Gさん夫婦の不安だらけの子育てに、ボランティアさんを始めとする心強い仲間が増えていきました。

相談をきっかけにして、地域に知り合いがいなかった一組の外国人夫婦の周りに、子育て支援の輪が広がっています。

ある母子の出来事

ある夫婦が、1歳になる子どもと3人でアパートに暮らしています。夫婦は結婚して豊田市に移り住んだため、近くに家族や友人がいませんでした。

子どもが生まれて3か月になる頃から、市の保健師と主任児童委員が定期的に家庭訪問を行い、様子を見ていましたが、日中は母親のHさんと子どものIちゃんが2人きりで、一日中、自宅にいるようでした。

母親のHさんは、Iちゃんが1歳を過ぎる頃から、なかなか歩き始めないことが気になるようになりました。以前、健診の時に保健師から「子ども発達センター」に行くよう勧められたこともあり、子どもの発達のことがどんどん不安になってきましたが、誰に相談すればいいのかわかりません。

そんな時、Hさんの様子を気にかけていた地域の主任児童委員がHさんに声をかけました。「一緒にこども園の「子育て広場」に行ってみませんか？」。

始めは乗り気ではなかったHさんも、何度も誘われるうちに気持ちが徐々に変化し、ようやく参加することになりました。最初のうち、Hさんは周りに馴染めずにいましたが、Iちゃんはだんだん、周りの子どもと遊ぶようになっていきました。

2回目に参加した時、今までハイハイしかなかったIちゃんが突然立ち上がり、少しずつですが歩き始める行動をとるようになりました。Hさんは子どもの突然の行動にびっくりして、同時に涙が出てきました。「この子がこんなに歩くことができるなんて…」。

それからしばらく経ったある日、交流館で仲良くおしゃべりをしたり、食事をしている親子連れの集まりの中に、Hさん、Iちゃん親子の姿が見られるようになりました。

今では、地域の子育てサークルにも積極的に参加するようになって、母子ともに表情も明るくなったようです。

それまで様子を見守ってきた市の保健師と主任児童委員も、その姿を見てとてもうれしくなりました。



あるレストランでの出来事

小学生のJ君は、お父さん、お母さんと一緒に、豊田市内のあるレストランに出かけました。隣の席には、2人の男性が座っています。2人のうち、1人の男性は「ワーワーワー…」と大きな声を出しています。

J君はお母さんにたずねました。「隣の席の人は、なんで大きな声で騒いでいるの？」。

するとお母さんは、J君に言いました。「あの人は、レストランに来られたことが嬉しいんだよ。とっても嬉しいから、ああやって喜んでいるんだよ」。

実は、大きな声を出している男性には、生まれつき発達障がいがあります。この日はヘルパーの男性と一緒に食事に来たのですが、お店にいる時でも、周りに人がいる時でも、大きな声をあげたり、ピョンピョンと飛び跳るといった行動をとってしまうのです。

J君のお母さんは、そんな男性のことを障がい者や変わった人、ましてや迷惑なお客ではなく、たまたま居合わせた「お客さんの一人」としてJ君に説明しました。

その後、ドリンクコーナーでピョンピョン飛び跳ねている男性を見て、J君は「本当にうれしそうだな」と思いました。

店員さんも、男性に「いつもご利用いただきありがとうございます」と声をかけています。レストラン側も男性を受け入れ、他の人と同じお客さんの一人として接しているのです。



障がいには、様々な特性がありますが、J君一家やこのレストランのように、周囲の環境や人々の意識によって、障がいのある人もそうでない人も、同じように暮らせるようになっていきます。

豊田市のミライを明るいものにするために、そして、4つのエピソードで見てきたような、身近にある、心があたたかくなるようなふれあい、支え合いの取組が「ミライのフツー」になるように、今、豊田市で進めていくべきことを、この計画にまとめました。